

# 生誕200年 近代フランス音楽の母“フランク”

## プログラム

今年はベルギー生まれのフランスの大作曲家セザール・フランクの生誕200年の記念の年に当たります。そこで今回はフランクの魅力を伝える名曲と名演奏でお楽しみください。

セザール・フランクは1822年12月10日、ベルギーのリエージュに生まれました。銀行家だった父は幼いフランクをピアノの名手にしようと考え、リエージュの音楽院に入学させました。11歳で音楽院を卒業、1835年13歳の時に一家でパリに出てパリ音楽院に入学、ピアノ、オルガン、対位法を学びました。38年16歳でピアノの名誉大賞を、40年にはフーガで1等賞を、翌年にはオルガンで二等賞を受け、42年優秀な成績で卒業しました。政治的な不安が強かった当時のパリでの生活は苦しく、ピアノを教えたり、教会のオルガン奏者となって生計を立て、早朝の時間を自身の作曲に当てていました。当時のフランス楽壇は交響曲や室内楽などの純粋音楽を主体とした古典派芸術は忘れられ、劇音楽が主流となっていました。フランクはオルガン奏者としてバッハの作品を研究し、その中から自分自身の音楽を探し求めて行きました。多くの天才作曲家とは異なり、50歳まで傑作と呼べる作品は書きませんでした。1871年に作曲された交響詩「贖罪」から1890年68歳で亡くなるまでに各ジャンルの傑作を生んで行きました。フランクの作品の最大の特徴は、独自の語法として確立させた「循環形式」を多用している事です。これは楽曲全体にわたり一つの主題が循環して発展するというもので、1879年のピアノ五重奏曲以降、多くの傑作はこの循環形式で書かれています。フランクの作風は大きく3つの時期に分かれています。1841年～1858年の第1期は、4つのピアノ三重奏曲やピアノ曲、声楽曲などがありますが、まだ独創性のない時期。1858年～1872年の第2期はミサ曲、賛歌、オルガン曲などの宗教音楽の時期で、オルガン曲に優れた作品が残されています。1873年以降が第3期で、交響曲、交響詩などの全管弦楽作品、弦楽四重奏曲を含む著名な室内楽作品。2つのオペラ、コラールなど独自のスタイルを確立した名曲が集中しています。フランクはフランスの教養と、長いフランスでの生活が加わり、晩年はフランスに帰化、フランス人として生きて行きました。またフランクはダンディ、ショーソン、デュパルク、ピエルネ、シャビエリなど、フランキストと呼ばれる多くの優れた弟子を生み、近代フランス音楽の母のような使命を果たしたのでした。1890年11月8日、フランクはパリで68年の生涯を閉じました。 (中川)

\*\*\*\*\*

### セザール・フランク (1822~1890): ヴァイオリン・ソナタ長調

イーゴリ・オイストラフ (ヴァイオリン) / ナタリア・ツェルトサロヴァ (ピアノ)  
(1992.5.16 東京芸術劇場でのライブ録音)

### ピアノと管弦楽のための「交響的変奏曲 嬰へ短調」

ホルヘ・ボレット (ピアノ)  
フェルディナント・ライトナー指揮北ドイツ放送フィルハーモニー管弦楽団  
(1982.3.19 ハノーファー、フンクハウスでのライブ録音)

\*\*\* 休憩 \*\*\*

### ピアノ五重奏曲へ短調 ~ 第1楽章から、第3楽章から

クリフォード・カーゾン (ピアノ) / ウィーン弦楽四重奏団  
(1979.8.20 オシアツハ修道院教会 「ケルンテンの夏」音楽祭でのライブ録音)

### 交響曲ニ短調

ダニエル・バレンボイム指揮パリ管弦楽団  
(1976.9.18 ベルリン・フィルハーモニーホール ベルリン芸術週間でのライブ録音)

# 曲目解説

## ピアノ五重奏曲へ短調

フランクは創作初期にはピアノ曲やピアノ三重奏曲を作曲していますが、教会のオルガニストになつてからはこのジャンルから遠ざかっていました。1879年に作曲されたこの作品を境に再び意欲的に室内楽作品を書いて行きます。循環形式を取り入れた最初の傑作が、このピアノ五重奏曲へ短調です。初演は1880年1月17日、国民音楽協会（フランスの音楽と新進作曲家を広めるために設立された文化団体）でサン=サーンスのピアノとマルシック四重奏団によって行われましたが、サン=サーンスは不満を持ったようで、演奏後、譜面を残して舞台を去ってしまいました。当時フランクの作曲の弟子であったオルメスという女性に、フランクはただならぬ感情を抱いていましたが、サン=サーンスも同じ感情を抱いていて、曲がオルメス嬢に対する感情がそのまま投影された音楽だったからではないか、とされています。

第1楽章 モルト・モデラート・クワジ・レント

第2楽章 レント・コン・モルト・センチメント

第3楽章 アレグロ・ノン・トロツポ・マ・コン・フォコ

## ピアノと管弦楽のための「交響的変奏曲 嬰へ短調」

ピアノ曲への意欲を取り戻したフランクは、ピアノ五重奏曲のあと1884年に名曲「前奏曲、コラールとフーガ」を書き上げます。翌1885年に作曲されたのが、ピアノと管弦楽のための「交響的変奏曲」です。初演は1885年5月1日、パリのサル・プレイエルで、パリ音楽院の教授でコルトーやカサドシュなどを育てた名教師ルイ・ディエメのピアノとフランク自身の指揮で行なわれました。曲は3部に分かれ、それぞれプロローグ、変奏曲、フィナーレからなっています。二つの主題を、ひとつは弦楽に、もうひとつはピアノに与え、ピアノとオーケストラが混じり合いながら発展し、変化して行く、というこれまでにない独自のスタイルを持った名曲です。

## ヴァイオリン・ソナタイ長調

フランクは、1986年唯一となるヴァイオリン・ソナタを完成させました。これはベルギーの大ヴァイオリニスト、ユージェーヌ・イサイの結婚のお祝いとして作曲され、イサイに献呈されました。大変気に入ったイサイは1986年12月16日、ブリュッセルで自身のヴァイオリンと夫人のピアノで初演しました。循環形式で書かれていますが、第1楽章冒頭の音型が全楽章を通して用いられ、この音型から二つの動機が分かれて、二つが共に楽曲構成の基礎を成しています。美しい旋律と瞑想的な祈りのような感情を持ち、内面的な情熱と豊かな楽想に溢れています。古今のヴァイオリン・ソナタの最高峰に位置する傑作です。

第1楽章 アレグレット・ベン・モデラート

第2楽章 アレグロ

第3楽章 レシタティーヴォ・ファンタジア

第4楽章 アレグレット・ポコ・モツソ

## 交響曲二短調

フランクの残した唯一の交響曲は1886年から1888年にかけて作曲されました。以前から弟子たちに交響曲の作曲を勧められていたフランクは、1886前後に相次いで発表されたサン=サーンスの交響曲第3番「オルガン付き」や弟子のダンディの「フランスの山人の歌による交響曲」などに刺激され、1886年作曲に着手、1888年8月に作品が完成しました。1889年2月17日、パリ音楽院にてジュール・パドルー（フランス最古のオーケストラ「パドルー管弦楽団」の創設者）の指揮で初演が行なわれ、弟子のアンリ・デュパルクに献呈されました。やはり循環形式で書かれていますが、その集大成とも言える作品で、「荘厳の動機」「希望の動機」「信仰の動機」「哀愁の動機」「田園の動機」「歓喜の動機」「勝利の動機」などの名がついた数々のモチーフが現れては結合されたり、再現されたり、複雑に絡み合い、見事に溶け合っています。フランクは厳格なドイツ音楽を尊敬していましたが、彼はそこに神秘的な美しさや宗教的な荘厳な響きを加え、全く新しい交響曲を創り上げました。ベルリオーズの幻想交響曲やサン=サーンスの交響曲第3番「オルガン付き」と並んで、フランスの交響曲を代表する傑作です。

第1楽章 レント - アレグロ・ノン・トロツポ

第2楽章 アレグレット

第3楽章 アレグロ・ノン・トロツポ